

海外における初級学習者のための 体験交流活動型コースデザイン

仁科陽江（エアフルト大学）
yoko.nishina@uni-erfurt.de

1. はじめに

1-1. 背景と目的

エアフルト大学では、選択必修外国語科目として学んだ日本語を、日本へ留学する少数派を除いて、実際に使うことなく終わってしまう学生が多い¹。そのような学生でも、教室で学んだ日本語を使ってみたい、実際に日本人と話してみたい、と思っている者は多い。エアフルトの町のようにほとんど日本に触れることのない環境にあって、いかにして日本語や日本文化を学ぶ機会を提供することができるか。日本語学習者に対するアンケートでは、卒業までの3年間のカリキュラムの中で日本留学を断念する学習者が多いことも発覚した。それならば日本をこちらに持ってこよう、そのような発想で、企画したのが、提携姉妹校来訪の受け入れ等を活用した、体験交流活動型日本語コースである。

日本から来訪する海外実習のグループとは、これまで言語学科の学生が英語かドイツ語で合同ゼミをやっており、日本語での発表もあるにはあったが付随的なものにすぎなかった。学内のほとんどの日本語学習者の学習歴は1年か2年にすぎないので、専門的なゼミを日本語で行うには日本語運用能力に欠けるというのも一因であった。テーマによっては日本事情の紹介や日独の比較など、日本理解に関わるプログラムにもなったが、日本語学習が主たる目的ではないものであった。いずれにせよ、日本語学習者とはゼミの外で、ちょっとした交流会をもっていた。そういう機会にいつもまのあたりにならなくなったのは、実際に交流を体験するということが当事者にとっては想像以上にインパクトが強い、ということである。それはドイツで日本人を迎えるドイツ人にとっても、日本からドイツを訪問してドイツ人と交流した日本人にとってもそうであった²。若い世代は、環境に順応する力もあり、すぐに友達を作る。これを日本語学習にうまく取り入れて学習効果をはからないすべはない。ねらいとして、実際のコミュニケーションを前面に押し出した。しかもまだ流暢には話せない初級学習者が対象である。習ったことを実際に使う場をつくることがまず第一歩である。

1-2. 先行研究

このコースをデザインする理論的な裏付けとして、「言語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通標準枠（CEFR）」³の理念をあげたい。複言語・複文化主義、行動中心主義、課題遂行能力、異文化理解をめざし、自律協働学習を実践する形としてデザインした。

¹ 仁科 2008:145

² 岐阜大学教育学部・大学院教育学研究科 2006、同 2008。海外実習の全行程の中でエアフルトでの学生との交流がとても印象に残ったという記述が随所にある。

³ Council of Europe 2001

短期訪日コースのための教材やそれに関する研究論文も参考になる⁴。ただし、それらはすべて、日本国内での体験交流活動を対象にしている。海外でも日本人学校や観光客を相手に応用できる部分はあるが、現地在住日本人もごくわずかなエアフルトの町にそのようなリソースはない。本稿で報告するコースは日本からの訪問者のスケジュールに合わせてデザインした筆者独自のものである。

以下、実践報告や考察を加えながら、コースデザインを紹介する。

2. コースの内容

3-1. 受講者とスケジュール

対象とするのは原則として、授業時間 160 時間程度の初級学習者で、『みんなの日本語初級 1』後半ないし終了程度の CEFR の A1 から A2 レベルに相当する者である。自由参加だが、通常の日本語クラスに並行して履修することが望ましい。進んだレベルの学生も受け入れる。このコースの達成目標は各参加者がたてる自己目標であり、個々のレベルに応じて交流を実現するのがねらいなので、コースのレベルを一定にする必要はない。むしろいろいろなレベルの参加者がいるほうが、それぞれにこなす課題に幅が出ておもしろい場合も多い。

コースは 1 セメスターで、学期開始の 10 月から 12 月の姉妹校訪問までが準備期間、12 月の数日間が集中した交流期間、冬休みを挟んで 1 月に交流後の報告や振り返り、その後の目標をたてて、セメスターは終わるが、3 月の春休みの間に日本の別の大学の学生がドイツ語講座受講のために滞在するので、体験交流活動の第二の機会がある(表 1)。

表 1 スケジュール

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	事前アンケート メール連絡 教室での活動・作業	交流 第一回		交流後の手紙 報告 反省	交流第二回

学内国際課で留学生のチューター制度がある。10 月に新学期が始まる前にチューターの募集があるので、日本からの交換留学生がある場合は、体験交流活動コース参加者にそのチューターのポジションに応募することを奨励している。また、言語センターで、タンデムと呼ばれる交換プログラムを実施している。ドイツ語を学ぶ日本人と日本語を学ぶドイツ人が自由な環境でお互いの言葉を学びあうという趣旨である。この時点で日本人留学生とコンタクトがあるのは、両者にとってとてもよいことで、12 月の交流会の準備においても、後述するプレゼンテーションのリハーサル等、有益なことが多い。

12 月の姉妹校訪問時の日程は 2008 年の場合、次の通りであった。12 日(土)夜、エアフルト到着。駅へ出迎え、宿舎へ案内。13 日(日)市内観光、クリスマスマーケット、ドイツレストランで食事、教会コンサート『クリスマス・オラトリオ』。14 日(月)小学校訪問、自由行動。近郊の町訪問。15 日(火)合同ゼミ・交流会、日本レストランで打ち上げパーティー。15 日(水)朝、エアフルト出発、見送り。2009 年度は、それまでこの交流期間に、交流会の進行やパーティーの段取り等、教師が行ったことをすべてコース参加者が行う方針にした。そのための準備期間約 9 週間の教室での活動の一例が表 2 である。

⁴ 国際交流基金関西国際センター 2008、熊野 2008、石井他 2008、熊野他藍 2009、熊野他 2009、矢沢 2006

表2 準備期間の教室での活動

週	内容	学習項目・活動	宿題・作業
1	オリエンテーション 事前アンケート 手紙の書き方	コースの目的や内容を紹介。授業の概要と進め方、評価について説明。 事前アンケート メールモデル文の読解。日本人にどんなことを伝えたいか話し合う。	メール文を書く
2	PC プールで	宿題を添削。実際に日本に出すメールを選ぶ。 『エアフルトの歩き方』構想。インターネット使用。日本語観光パンフレット読解。語彙の確認 タスクシート、マップ作成（グループで白地図を分ける）。	『エアフルトの歩き方』に必要な資料・情報を集めて、まとめる。
3	日本人の希望を考慮に入れて、情報をまとめる。 町を歩く	メールの返事の読解。 『エアフルトの歩き方』修正。道案内や営業時間、料金等、説明できるようにしておく。 名所を自分のことばで説明。食べ物や飲み物の説明。郷土料理の紹介。 コンサート演目の説明など。	『エアフルトの歩き方』完成
4	出会い	初めて出会った人との会話。 出迎え。宿舎への道案内。宿舎の設備を説明。 自己紹介。出身地や家族、専門、趣味など。 質問を想定して答えを考える。相手の言うことがわからなかったときの表現。待遇表現。 携帯番号、メールアドレスの交換、別れ際のあいさつ。 ロールプレイなどを通して、練習する。	テーマ別に語彙や表現をまとめる。表現のヴァリエーションを知る。
5	学校について	日本の学校システムや実態について学ぶ。自国の学校と比べる。	プレゼンテーションのテーマを考える。資料集め。
6	プレゼンテーション	プレゼンテーションのテーマを話し合う。テーマごとにグループ分け。ワークシートを用い、構想。	プレゼンテーションの原稿を書く
7	プレゼンテーション	宿題の原稿の添削。話す練習。質疑応答の表現。司会者をきめる。	プレゼンテーションのプログラムを作る。
8	リハーサル	プレゼンテーションのリハーサル。内容や発表のしかたについて話し合う。評価。	
9	復習・確認		

3-2. 体験交流活動の準備

事前アンケート

最初に行う事前アンケートは、次のような項目をもち、まず自分で自由に表現させる。これは母国

語で答えてもよい。

- 日本人とどんなことがしたいですか。
- 日本語でどんなことができるようになりたいですか。
- 日本人に何をしてほしいですか。
- あなたは何ができると思いますか。
- 問題点や不安なことがありますか。

日本人が来たら何がしたいか、そのためには何が言いたいのか、ではそれを言うための日本語表現はどのようなものか。上から教えるのではなく、いわば下から、つまり学習者の要求する学習内容をもつので、通常の日本語授業とは動機づけが異なる。準備期間を前に学習者に活動の目的を意識化させるものでもある。

メール交換

訪問までにメールのやりとりを何度かすることになるので、メール交換の準備を PC プールです。カジュアルな手紙スタイルの作文を学び、パソコンで日本語を書く練習にもなる。メールを書く際のタスクの内容としては、自己紹介、出迎えの時間、宿舎について、交流会での発表のタイトル、そのほか滞在中の希望など。お互いに相手に希望を伝えて、その準備ができるようにする。メールの返事次第で、タスクが設定される。たとえば、ある女の子がドイツの美容院に行きたい場合、おたすけシート（美容院で使う日独語彙リスト、おすすめ美容院の紹介など）を作る。

コース参加者に点数評価を必要とする場合は、宿題として書いたものを教師がチェックして、内容と表現を評価の対象のひとつにしてもよい。

観光マップ『エアフルトの歩き方』

事前アンケートで、来訪する日本人にしてあげたいこととしてまず挙がるのが、市内の観光案内である。日本のベストセラー『地球の歩き方』には、やっとエアフルトについてわずかなページが割かれるようになった。町の観光局でも日本語版が出たが、なぜか日本語版だけ有料だったりする。そういうわけで、自家製の『エアフルトの歩き方』作りをめざす。既成のものよりも、自分が案内したいところを強調することもできるオリジナルである。手書きのマップでも、既存の市街地図にルートやコメントを書き込んだものでもよい。

町を歩く際に必要な表現を自分たちで考えさせることも重要である。教材を作って与えるのが教師の仕事と思われているだろうが、自分たちがやりたいことを実現させるために、何を言うか、という出発点であれば、語彙リストなども自分たちで作るのである。この時点で初級後半の学習者は、たとえば建物の成立を説明するための受身表現をまだ知らない。シラバスでこれを習ったからこれが使える、のではなくて、これを使いたいから、未習の文法事項も前倒して学習する。教師は求められた学習事項を提供する。学習者自身が既習事項と未習事項に気づき、習得の必要性を感じたとき、学習効果は一層高まる。学習項目を整理し、教材を作るのは自分達なんだという自覚が自律学習を促し、その際、知恵を集めて協働学習ができる。

インターネットの活用

実際に『エアフルトの歩き方』が完成したのは、準備期間の終わりごろであった。準備計画の項目は、必ずしもその週に完成するのではなく、いくつかの事項が並行して進んでいることも多い。プレゼンテーションについても、やるということは最初にきめていたので、早くからいろいろ考えていたようである。また、日本からメールの返事が来た段階で、みんなに知らせては、対処もしていた。そこ

で活用したのが、インターネットフォーラムである。

大学側でも e-Learning を推奨して、ホームページでフォーラムを活用することができるようになっていたが、サイトの管理を教師でなくて学生ができるよう、民間の無料サイトを使った。それぞれのタスクに応じてトピックを立ち上げ、参加者が常に情報を得たり、考えることを書き込んだりできる。この活動は付随効果があって、通常の日本語の授業についても、宿題の情報などをここで交換するようになった。これも学習者自身がそういうトピックを立ち上げたのである。そうやって、ほかの授業にも積極的に臨むようになった。

出会い

初めて出会った人との会話については、相手が何を言ってくるかわからない、という意味ではプレゼンテーションと違って、周到に準備をしておくというわけにはいかないし、簡単な受け答えにしても、ほんの少し表現が変わるだけで理解できないことも多い。そのために表現のヴァリエーションを知っておく。「どこから来たんですか/ご出身は/お国はどちら/どこですか」といった具合である。たとえば「出身」という語彙は『みんなの日本語初級』の最後まで出てこない。が、知り合った人から聞かれる可能性は高い。相手について自分は何を知りたいか、相手は自分について何を知りたいと思うか、事前に考えさせる。そこでは事前アンケートも反映するであろうし、インタビューなどを予定していれば質問表を作る基礎になる。その際、日本語表現をチェックしておくことは言うまでもない。

交流会の場では、はじめの硬い雰囲気がなごむような、アイスブレイクやゲームを予定する。体を動かせることや、日本とドイツについてのクイズなども良い。

初心者クラスの人やほかのゲストを交えてゲームがしたい、と言った者は、自分たちでゲームを考え出して、説明の文も日本語で考えた。異文化相互理解学習の一例として紹介すれば、ドイツ人が自分たちの伝統を紹介するゲームを次のように行った。日本人とドイツ人を混ぜていくつかのグループに分け、それぞれ、あるドイツの伝統行事あるいは祝日について、ドイツ人は日本人に説明し、日本人が理解したことを書き取って、あとでカレンダー順に並べて発表する。クリスマス、イースター、大晦日、カーニバル、ニコラウスの日、子供の誕生日などが扱われた。

日本語の習得度が低い学習者も交えて行うこのゲームは、まさに複言語・複文化の錯綜する例であった。日本語で言えないこと、ドイツ語で言っても相手に通じないこと、英語を使ってみること、あるいはジェスチャーや絵や図、YouTube など、使えるものを何でも使いながらコミュニケーションを図るということも、その場で学ぶことになる。

できることをやる

学習者がやりたいことをやる、というのが前提であるが、できることをすればいいのであって、できないことはしなくてよい。それははじめからわりきっていたほうがよい。このエクスカッションでは、現地の学校訪問もプログラムに入っている。密着交流という意味では学校訪問に同伴してもよいが、先方の先生や生徒のドイツ語の話を通訳するほどの日本語力がないことは明らかであるし、困難な状況で自信を失ってもいけない。また、朝から晩まで、宿泊地まで同行しているので（2009年度は日本人学生はドイツ人学生のアパートに泊まって朝食もともにした。）、たまには解放される時間がある。その時間に大学の通常の授業がある学生もいるかもしれない。ただし、学校訪問を終えた日本人にその感想を聞いたりする機会は必ずあるから、そのテーマについて話すことは準備しておけばよい。

プレゼンテーション

学校というテーマは、来訪する日本人学生がほとんど教師志望の教育学部の学生であることや、ドイツの学校のシステムが日本とはかなり違うことから、交流相手の日本人にとって関心の深いテーマである。プレゼンテーションのテーマを考える一環で、たとえば日本の学校教育制度や実態について、教師がひとつのモデルプレゼンテーションを行う。「日本の小学生」というリソース⁵もある。この分野で不可欠のことば（義務、制度、公立、私立、制服、科目、時間割表、給食、放課後、塾など）の説明をして、一方的にならないようにクイズなどをとりいれながら、できるだけ平易なことばを用い、インターアクティブにプレゼンテーションを行う。そうやって日本のことを学んだ後、ドイツの教育事情について、学習者たちが考える。モデルプレゼンテーションの意義としては、日本事情や語彙の確認も学習内容だが、単に受身的に教えてもらっても退屈になりがちである。日本ではこうだが、ドイツではどうか、それを日本人に伝える、というタスクがあると、積極的な態度になる。

プレゼンテーションのテーマとしては、このように自国を紹介するものとして、ドイツの地理、文化、芸術、料理など、アウトバーン・自転車道・市内公共交通機関など都市計画や環境に関するもの、クラインガルテンやドイツ人の日常なども考えられる。すぐに使えるドイツ語ワンポイントレッスンもおもしろい。他方、日本にまつわる自分の経験や思い出を語るテーマで、日本人や日本文化との出会い、どうして日本語を勉強しているか、というテーマも話しやすい。「日本のへんなこと」という発表ではその場がとても盛り上がった。テーマの選択は、日本側の海外実習のテーマにも関係する。世界における日本という視野で、ドイツにおける日本文化の受容を実際に見ることも、初めて外国に来た日本人には有益である。

交流の時期がアドベントというクリスマス準備期間であることから、クリスマスについてのプレゼンテーションをおこなったこともあった。予備学習に日本の祭りについてのプレゼンテーション教材も使える⁶。ワークシートを用いて、次のような質問をたたき台にして、以下の学習活動を行う。

- ・ クリスマスはいつ始まりますか。何日続きますか。
- ・ どこでありますか。あなたはどこへ行きますか。
- ・ 国じゅうでありますか。
- ・ あなたの国でいちばん大切な行事ですか。
- ・ クリスマスは何を祝いますか。
- ・ どんなイベントがありますか。
- ・ どんな習慣がありますか。
- ・ あなたは何をしますか。

必要な語彙や表現のリストを作る。アドベント、教会、カレンダー、祝日、キリスト、クッキー、ケーキ、クリスマス・ツリー、もみの木、サンタクロース、ミサ、宗教（的）、伝統（的）、歴史（的）などで、カタカナことばも多い。全体の構成を考えてアウトラインを書く。導入、主な情報（時期、場所、意味、習慣など）、自分のコメント、まとめ、それに始め方と終わり方を付け加える。箇条書きにならないように、段落や文の接続表現（「まず」「次に」「最後に」「たとえば」「それから」「そのため」など）を使用する。

宿題として書いた原稿のチェックを受けて、プレゼンテーションの準備をする。視聴覚資料やハン

⁵ 国際交流基金関西国際センター 2008 付録 CD

⁶ 国際交流基金関西国際センター 2004 ; 10-18

ドアウトなどを発表資料として用意するが、自分で焼いたシュトレンやツリーの飾りなどの実物を用意するのも楽しい。ドイツ人の女子学生には、ゲストが来るとなると腕によりをかけてケーキを焼いてくれる者もいるのである。クッキーなどはその場で配ってもよいし、おみやげにもなる。2009 年度の場合、グリム童話について発表した学生は、ヘンゼルとグレーテルに出てくるお菓子の家のような Lebkuchenhaus（レープクーヘンというクリスマス特有のお菓子の家）の実物を聴衆にふるまった。

テーマの選択時に、実際には、日本人ゲストの関心が高いであろう学校関係のテーマが面白くないと発言するドイツ人もあった。学習者主体であることが第一なので、テーマの選択も、学習者の希望を最優先したい。ただし、学習者の日本語のレベルを大きく超えたテーマにすると難しい。初級ならば、身近で具体的な話題にして、あまり複雑な問題は避けるべきだろう。が、そのあたりは学習者たちも直感的にわかるようで、結果的には、学習者の日本語のレベルが反映したテーマが選ばれた。日本語能力の高い（と思っている）学生は、何かを紹介したり経験を話したりすることにとどまらず、聴衆に問題を投げかけて、自分の意見や考えを述べるようになる。

また、それぞれの学生の個別の専門が生かされたテーマになっており、たとえばドイツ語学専攻の学生はドイツの文字の歴史とカリグラフィについて、社会学専攻の学生は日本人の集団意識について発表した。その後ディスカッションになれば、内容的に専門性の高いものになる。ディスカッションの場では、日独の比較や日本人論について、なんとか表現したい欲求はあるが、ことばの力とのギャップが緊張感を生む。そういう経験が、将来の学習目標に生かされてくる。コースデザイナーもまた、次の体験交流活動の機会には、ディスカッションの準備をするなど、更なるステップにつなげることを考える。

通常のクラス分けを行なった日本語の授業と違い、この種の活動では、異なったレベルの参加者でも相応にタスクを遂行することができる。むしろ、いろいろな受講者の間で、その多様性や個性を生かしたプログラムを作ることができる。

発表のリハーサルは必ずやったほうがよい。大きい声で、ゆっくり、はっきり、間をとって、聴衆を見て話す。できれば原稿を読まずに、メモだけでプレゼンテーションができればよいが、初級の段階では心理的にも難しい。原稿やメモの利点・欠点を話し合い、他の人の発表を見てピア評価をすることによって、より良いプレゼンテーションのあり方が自覚されるであろう。

2009 年度は学内の交換留学生を招いてリハーサルを行ったが、たいへん実りのあるものであった。一例を挙げれば、ドイツのメルヘンを紹介したグループが、発表の最後に、「赤ずきん」の日本語による朗読をインターネットから 10 分間流す、という構成にしていたところ、日本人の聴衆から、「赤ずきんの話は日本人はみんな知っている」「わざわざドイツまで来て、こんなものを聞かなくてもいい」という発言が出た。発表者たちは日本語の朗読サイトを発見して喜んだのだったが、それは自分たちにとっておもしろいすぎない、ということに初めて気づいた。これを契機に、訪問する日本人の立場にたって、どんなことがおもしろいか、興味深いか、視点の転換をすることができた。異文化理解能力というのは、どのぐらい相手の立場になれるかということではないだろうか。

そのほかにも、「声が小さい」「もっと練習したほうがいい」「理解できない言葉がある」「下ばかり向かないように」などのコメントも出た。本番のために、より良い発表にしようという意志が、リハーサルを見に来た日本人と共有されたとき、前向きな批評が多く出て、謙虚に受け入れられた。その結果、発表の内容やし方が格段に改善された。日本人対ドイツ人という構図が、ここでゲスト対日本人を含めたホストという構図に変わったのである。留学生たちが初対面ではなく、学期初め以来チュ

ーター制度やタンデムプログラムを通して親しくなっていたことは意義があった。本番では初対面の日本人のゲストはたいてい礼儀正しく聞いてくれるだけの場合が多いので、自分の発表の弱点を自覚できないまま終わったかもしれない。

もちろん、リハーサル場でいつも活発にコメントが出るとは限らないので、評価シートを用意する。「何についての話だったか」「何がおもしろかったか」「わかりやすかったか」「声の大きさ、スピード、間の取り方はよかったか」などの項目に記述式で答えてもらう。おおまかにコメントを一言だけ書いてもらうようにしてもいいが、かえって漠然としてしまって、具体的な項目があるほうが書きやすいのではないと思う。コメントを自由に書ける欄も作っておく。学習者同士のピア評価の場合も同様であるが、母語話者が評価する場合は、内容や言語能力についての項目をもっと細かくしてもいい。学習者が他の人の発表について評価シートに記入することは、どんなことに気をつければいいのか、意識的に取り組むことができ、自分の発表も客観視できる。自己評価については後述するが、プレゼンテーションを教師が評価して成績を出す必要がある場合は、評価シートを点数式にして、次のような項目を考慮する。内容については、全体の構成、スピーチの内容、表現（文法の正しさや語彙の使い方）、発表資料の内容など。発表のしかたについては、発音や話し方、態度、発表資料の使い方、聴衆とのかかわりなど。加えて、クラス活動への貢献度を評価してもよい。具体的な項目を立てて点数式の評価シートを作成すると、評価された側も納得できる。

3-2 体験交流活動期間

役割分担

交流期間の役割分担をあらかじめしておく。メール交換については、メール本文はみんなで考えあったとしても、自分のアカウントを使うメール係がいた。市内観光はみな一緒にしても、それぞれ観光マップの説明を書いた場所について、担当した者が説明する。そのほか、出迎えには誰が行くか、宿舎への案内はどうするか、見送りには誰が行くか、別れの挨拶を誰がするか、交流会のプログラム作りをするとき、司会は誰がするかもきめておく。パーティーの段取り、会場の日本レストランと交渉・予約・会計はだれが担当するか。ドイツレストランのメニューの説明、コンサートの案内係など。交流会で出なかったような余興をパーティーのために用意してもよい。

教師は、実際の体験交流自体にはあまり介入しないで、何か困ったことが起こったときなどのためにヘルプ態勢だけをとっておく。

活動・観察記録

体験交流活動期間は、各自の役割をこなしつつ、活動記録をつける。それから、日本人の言動を観察して、観察記録をつける。観察記録の内容は、日本語運用はもとより、行動ストラテジー（ジェスチャー、態度、質問のし方、話しかけ方、会ったときや別れるとき、Noの言い方）にも注目する。フィラーやあいづちの特徴、買い物をするときや注文を決めるときの態度にも独特の特徴が見られるかもしれない。この記録は日本語でもいいし、母国語でもよい。ここでの記録をもとに、交流後の反省会で話し合う。

これまでの交流で出た感想には、はじめて生の日本語に触れた驚きや日本人と触れ合った感動を述べたものが多い。「日本人の日本語は機関銃のように速い」「文が短くマスやデスで終わらない」「相手によって話し方や声の高さが違う」「自分のためにゆっくりはっきり親切に話してくれた」などと観察している。「もっと話せるかと思っていた」「何をどう言ったらいいかわからない」といった類の発言は、デザインされた交流準備コースを受講した後では、聞かれなくなった。そのようなことはコース

の中ですでに経験していたからではないだろうか。また、「ほかの人にまかせてしまった」ということも、役割分担をしたり、自己目標がはっきりしていれば、避けることができる。

初級のこの段階では、まだ尊敬語や謙譲語の敬語表現を習っていない。マス形だけである。しかし、実際に見聞きするのは、学生の間では「来る」、先生に対しては、「いらっしゃる」「来られる」「来はる」などで、「来ます」というのを案外聞かないのである。先生と同級生との中間的な存在の先輩に対しては、タメ敬語というまたちがう表現もある。学生同士の会話、態度、先輩と後輩、先生と学生の間の待遇表現や態度、日本人同士、日本人とドイツ人など、相手によって言動が違ってくるかどうかが観察するとなにかしら発見があるようだ。このことは、社会言語能力⁷養成の導入にも有益であろう。

また、日本語に限ったものでなく、日本人の行動規範についての観察も異文化理解に貢献する。2009年度は日本人学生がドイツ人学生のアパートに住み込んだので、バスルームの使用時間の短さや食器を洗ってくれていたことなど、生活面でも、ドイツ人学生には驚きの体験が多かったようだ。

3-3 体験交流後

このコースデザインにおいて、体験交流活動後の振り返りは重要である。交流期間は、朝から晩まで大変密度の濃い時間を過ごすわけであるが、そのあとは大学も休暇になり、休暇明けから春休みに入るまでの短期間のコースの内容は表3のとおりである。正月の時期なので、日本の文化や習慣を学ぶ可能性も織り込まれている。春休み中（通常3月）に、二度目の体験交流の機会がある。

表3 交流後

週	内容	学習項目・活動	宿題・作業
1	年賀状インターネットビデオ通信	交流した人から届いた便りの読解。はがきの書き方。日本の住所、十二支について学ぶ。筆を使う。年賀状を書く。 スカイプで話す。	年賀状を完成させる。
2 3	反省	体験交流活動について報告する。 活動記録、観察記録をもとに、気づいたことなどを、話し合う。 プレゼンテーションのビデオを見ながら話し合う。 事前アンケートと比べる。できたこととできなかったことをリストアップする。 今後の学習目標をたてる。(目標、勉強方法、将来の指針など)	報告書、反省文をまとめる。 二度目の自己目標設定をする
4	体験交流第二回(リベンジまたは発展)	日本人のためのドイツ語コースで実習あるいはボランティア。 できなかったこと、やりたかったことを補う。	
5	反省	コースについてのフィードバック	二度目の自己評価をする。

この時点で事前アンケートと比べるのは、当初の自己目標と自己評価を意識化するためである。活動記録をみながら、実際にできたこととできなかったことを考える。ビデオで客観的に自分を見て、

⁷ Council of Europe 2001:118 “sociolinguistic competence”

ほかの参加者の評価や意見も参考に、自己評価をする。評価は、教師や交流した日本人などから「される」ものでなく、自分で「する」ものになっている。教師もコメントやアドバイスをすればよいが、このコースで教師が評価するのは、ほかならぬ学習者自身の自己評価であるといつて過言ではない。

自己評価をもとに、自分の次の学習目標を考える。コースの最後に予定されている第二次体験交流活動に、どのように望みたいか考える。日本人のためのドイツ語コースが春休み中に数週間実施され、ドイツ語を教える実習生、教室外での活動をサポートする実習生なども募集されるので、応募を奨励している。ボランティアで体験交流活動をする可能性もある。ここで、第一回にできなかったことがあれば、リベンジとして実現させること、うまくできたことでもさらに発展させることを第二次目標とする。第二次自己目標はそれまでより具体的で意識化されたものにもなり得る。

第二次交流活動が終わった段階で第二次自己評価をする。このように、自己目標の設定と活動の自己評価は、交流の機会があるごとに、何度でも繰り返すことができる。そして、そのたびに、前よりもよい結果になっていることが期待できる。学習者の満足度が上がり、学習効果があったことが自覚される(表4参照)。最初に抱いていた不安が取り除かれ、海外の学習者に特に顕著ないわゆるコミュニケーション・ストレスも少なくなる。このように、継続的に動機付けが常になされ、学習者は自信をつけ、達成感を得ることができるのである。

表4 自己目標と評価(例)

事前アンケート (自己目標)	準備期間・交流時 (自己の活動)	反省 (自己評価)	学習目標 (第二次自己目標)	目標の実現 (第二次自己活動)	反省(第二次自己評価)
日本人に町を案内してあげたい	観光マップを作成。これを見ながら、求められたことを示すことができた。	名所の歴史的な背景など、説明する日本語の知識がなかった。	なかった知識を補って、次回はうまく話せるようにしよう。	リベンジとして実現	一度めよりも良い結果になった。

今後の学習目標をたてる際、目の前の目標はこのようにたてることができるが、コースの終わりがすなわち学期の終わりでもあり、コースの参加者は次学期、1年後、2年後の目標も考えるようになる。具体的で達成が現実的な目標から、将来への大きな目標に発展する可能性もある。体験交流活動を機に、日本留学を決心するものもいるし、卒業後の進路として考える者もいる。また、交流会のゲームに参加したり先輩のプレゼンテーションを見たりした初心者クラスの学生は、来年は自分たちの番であると、早々と自己目標をたてている。

コースに対するフィードバックを参加者から必ず出してもらおう。「参加してよかったと思うか」「ほかの学習者にも薦めるか」という項目には例外なく肯定的な回答があった。「日本語を十分使えたと思うか」「使えなかったとしたらそれはなぜだと思うか」また、「改善すべきこと」「意見・感想」など、その内容をコースデザイナーが次の体験交流活動型コースに役立てる。

3. まとめ

行動志向

CEFRでは、action-oriented approachとして、言語の使用者ないし学習者は、一定の環境や行動領

域の中で課題を遂行することを要求されている social agents であるとしている⁸。これはそのまま体験交流活動型コースにあてはまることで、そこでは目的のために、話す、聞く、書く、読む、といった総合的な能力が問われ、単なる会話コースや偶発的な交流機会とは異なる。自分たちは何がしたいか、そのために何が必要か、自主的に目標をたて、その遂行のために積極的に行動する学習者主体の理念が根本にあるコースであるといつてよい。

課題遂行能力

体験交流準備期間に、メールの交換、観光案内の作成、プレゼンテーション、加えてスケジュール作りやパーティーの段取りなど、さまざまなタスクがある。実際の課題遂行の完成度に合わせて、継続目標を設定する。

自律協働学習

こなさなければならないタスクは、誰から与えられたものでもない、自分で設定したものなのであり、自国の文化を紹介したり町を案内したりするという、学習者から発信する学習内容である。そのために既習・未習事項を確認して、必要な語彙や文法事項をチェックする。自分で選択したテーマについて、プレゼンテーションをし、自己評価やピア評価をする。自己目標を評価して、さらなる学習計画をたてる。いわば、学ぶことを学習する自律学習でもある。

体験交流活動は一人ではできない。ほかの学習者たちと一緒に計画し、役割分担し、時間的にも場所的にも、ともに活動することが前提となっている。

体験交流活動を越えて、学習の仕方についても、学習者自身が新たな視点を得た。インターネット上のフォーラムが情報提供や問題解決の場になったように、通常の授業でも、お互い話し合い、知識や情報を共有し、助け合いながら学習するようになった。

教師の役割

このような学習者主体のコースでは、教師は、きまった課題や教材を与えたり学習内容を指示したりするのでなく、学習者が自律的に計画し準備するのをサポートするファシリテーターに徹する。アイデアを自由に話すことにはじまって、資料の作成なども学習者主導である。教師は、メールのやりとりやインターネット・フォーラムをとおして状況を把握しながら、質問・相談の返答や草稿の添削など、求められたことに対応していく。

多様性と個別性

このコースには多様な参加者がいる。初級学習者のためにデザインしたものであるが、レベルがそろっていないければいけないという固定観念からの転換をはかる。レベルや専攻の違う者は、違うからこそ、お互いを尊重し、刺激しあい、皆それぞれのよいところを引き出しつつ、幅広い日本語を学ぶことができる。日本滞在経験者もいれば、日本人を見たことがないという者もいるし、日本人留学生が参加する部分もある。そのような多様性、個別性を、「ばらつきでなく資産」⁹であるとする。

過程の重視

実際に、体験交流活動の場でどのくらいうまくいったか、ということももちろん大切ではあるが、このような学習形態で重要なのは、その学習過程であるとする。この学習過程を経てこそ、学習者が意識的に自己評価できる。事前アンケート、交わしたメール、書き込んだインターネット・フォーラ

⁸ Council of Europe 2001:9

⁹ 矢野 2006:5

ムなどは、学習過程の記録でもある。

異文化相互理解学習

実際に日本人との交流を体験するということが、異文化相互理解に大きく貢献することは言うまでもない。日本語、日本人、日本文化に触れ、また、自国文化や行動規範について考える契機にもなり、交流の後で内省することも異文化相互理解を促進する。

全人教育としての日本語教育

最後に、自律協働学習をねらいとした学習形態が常に肯定的な結果になるとは限らないことも付記しておく。学習者の自律協働学習というものは、ほかから強制はできない。実際、参加するように誘っても、時間がないからと参加しなかったり、初期にグループから別れたものもあった。

が、いったんはじめると、仲間意識が強くなり、途中やめする雰囲気はなくなったようだ。互いに力をあわせて創造学習ができた。日本人到着の前日、インターネットフォーラムには Los geht's (さあ、始まるぞ) と書き込みがあり、日本人を駅に迎えに行く 1 時間前に、みんなで決起大会よろしく集まりがあった様子である。何週間にもわたる準備期間と、日本人密着の数日間を経て、主体性、社会性、責任感、協調性を育てる、いわば全人教育的な日本語学習となった。

4. おわりに

日本人との交流を実際に体験した日本語学習者達の感動をもとに、体験交流活動を日本語学習に生かそうとするコンセプトは以前からあり、断片的に実践してきたが、その準備から交流後の振り返りに至るまでを一つのコースとしてデザインしたのが本稿である。文型シラバスを基礎としている通常のレベル別授業に対し、ここでは、学習内容や学習方法、評価、教師の役割などにおいても、パラダイムの変換が求められるものになった。

教室での教師中心型のメソッドでは得られない成果を得るべく、学習者中心型のアプローチとして行動志向の日本語学習をめざすものだが、まだまだ実験的な部分も多い。今後実践を重ねていくうえで、さらに補充改善していきたいと思う。

参考文献

- Council of Europe 2001 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press
- 池田玲子・舘岡洋子 2007 『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 石井容子・熊野七絵 2008 「日本語・日本文化社会への気づきを促す「研修活動の記録」—自律学習の意識化を目指して—」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』2008 年度日本語教育実践研究フォーラム
- 門脇薫・西馬薫 1999 「みんなの日本語初級 やさしい作文」スリーエーネットワーク
- 熊野七絵 2008 「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』第 18 号
- 熊野七絵・品川直美・羽太園・田中哲哉・矢澤理子・西野藍 2009 「短期訪日コースのための教材開発—『日本語ドキドキ体験交流活動集』—」国際交流基金日本語教育紀要 5 号
- 熊野七絵・羽太園 2009 「言語と文化を統合した学習環境のデザイン～地域のリソースを活用した体験交流活動型学習の提案～」JSAA-ICJLE2009 年度研究大会 ポスター発表
- 岐阜大学教育学部・大学院教育学研究科 2006 「2006 年度総合文化海外演習（ドイツ）体験記」

- 岐阜大学教育学部・大学院教育学研究科 2008 「2008 年度後期総合文化海外実習」
- 国際交流基金 2007 『日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』 ひつじ書房
- 国際交流基金関西国際センター 2008 「日本語ドキドキ体験交流活動集」 凡人社
- 国際交流基金関西国際センター 2004 「初級からの日本語スピーチ」 凡人社
- 田中哲哉 2003 「海外の日本語学習者への支援－国際交流基金関西国際センターの現場から－
第14回 日本理解のための取り組み」 明治書院『日本語学』2004年2月号
- 仁科陽江 2008 機関報告 -Erfurt 大学(ドイツ)- 日本語教育連絡会議論文集 Papers
Presented at the 20th International Conference on Japanese language Teaching Vol.20 :
144-145
- 矢沢理子 2006 「専門職従事者のための日本語研修 ー行動志向のコースデザイナー」『専門
日本語教育研究』第8号:3-8